

福 沢 健

- 注 3 岸俊夫『日本の古代宮都』岩波書店、一九九三。
- 注 4 水野祐『新版日本古代王朝史論序説（水野祐著作集）』早稲田大学出版部、一九九二。
- 注 5 千田稔『平城京遷都 女帝・皇后と「ヤマトの時代」』中公新書、二〇〇八。
- 注 6 金丸和子『韓国・日本における弥勒の造形の変遷に関する研究』文部科学省科学研究費補助金研究成果報告書、科研課題番号15520091、二〇〇六。
- 注 7 青木周平『古代文学の歌と説話』若草書房、二〇〇〇。
- 注 8 川口勝康「舒明御製と国見の源流」、『万葉集を学ぶ 第一集』有斐閣、一九七七。

八尺鏡を取り繋け、下枝に白丹寸手、青丹寸手を取り垂でて：

とあるように、香具山は高天原にあるされる「天安の河」「天の金山」と並べられています。ここから見ると、岩屋戸神話では香具山は高天原にあるとされていることが分かります。また、『伊予国風土記』逸文には、

伊豫の国の風土記に曰はく、伊与の郡。郡家より東北のかたに天山あり。天山と名づくる由は、倭に天加具山あり。天より天降りし時、二つに分れて、片端は倭の国に天降り、片端は此の土に天降りき。因りて天山と謂ふ、本なり。

とあるように、天から山が二つに分かれて落ちて、そのうちのひとつが伊予国の「天山」となり、もう一つが大和国「天加具山」になったと記されています。

香具山から見えた風景は「国原は 煙立ち立つ 海原は 鷗立ち立つ」とうたわれていますが、この風景は実景ではなく、国土全体の繁栄する様子を「幻視」したものです（注7）。また、最後の「うまし国そ 蜻蛉島 大和の国は」は、「国土の豊饒を予祝して唱えられる神話的詞章（レゴメナ）」だと考えられています（注8）。「うまし国そ 蜻蛉島 大和の国は」という詞章は、『日本書紀』神武天皇三十一年四月条に、

三十有一年の夏四月の乙酉の朔に、皇輿巡り幸す。因りて腋上の嘸間丘に登りまして、国の状を廻らし望みて曰はく、「妍哉乎、国を獲つること。内木綿の真進き国と雖も、蜻蛉の譬帖の如くにあるかな」とのたまふ。是に由りて、始めて秋津州の号有り。

とあるように、神武天皇の国見に由来するものです。「蜻蛉の譬帖」とは蜻蛉が交尾して輪のようになって飛ぶ様子のことです。神武天皇は山々に囲まれた地形を「蜻蛉の譬帖」に譬えたのです。二番歌の末尾に神武天皇由来のレゴメナが用いられ、そのレゴメナの持つ言霊の力によって、大和国の繁栄は約束されました。舒明天皇の統治する大和国は、「海原」「国原」を含む広大な領域でした。二番歌は、舒明天皇が大和の広大な領域全体を統治する天皇であることを示しているのです。

### ●まとめ

舒明天皇は傍系の息長系王族の二世王、すなわち今までの大王と系譜的に直結していない大王でした。舒明天皇の和風諡号は、息長足日広額天皇です。舒明天皇が即位することによって、押坂彦人大兄皇子を始祖とする新王朝が始まりました。舒明天皇以後の天皇（皇極・斉明天皇、孝德天皇、天智天皇、天武天皇、持統天皇、文武天皇）は、すべて押坂彦人大兄皇子の子孫です。舒明天皇は、押坂彦人大兄皇子系の初めての大王としての記念碑的な位置を占めていました。『万葉集』が舒明天皇の国見歌を雄略天皇の歌に続けて並べたのは、以後、飛鳥・奈良朝と続いていく押坂彦人大兄皇子系の王朝が舒明天皇の時代から始まることを明示するためでした。舒明天皇から続く押坂彦人大兄皇子系の王朝の繁栄の「歴史」を描くことが、『万葉集』編集の目的なのです。

注1 辰巳正明『万葉集と中国文学 第二』笠間書院、一九九三。  
注2 野家啓一『物語の哲学』岩波書店、二〇〇五は、「歴史」につ

いて、「過去の出来事や事実は客観的に実在するものではなく、「想起」を通じて解釈学的に再構成されたものである」と述べています。本論で「歴史」をわざわざカッコ付きにしたのは、『万葉集』の「歴史」が後世（具体的には持統朝）の解釈によって生み出されたものであるという立場を取るからです。

ず。本より務めよ。汝肝稚しと雖も、慎みて言へ。

であったと主張しました。その内容は「私はお前を次の天皇にしよう」とずっと考えていた。よく努力しなさい。お前は未熟ではあるが、発言に気をつけよ」というものです。この言葉通りだとすると、推古天皇は山背大兄王の即位を望んでいたように聞こえます。蝦夷と山背大兄王のどちらの言葉が正しいのかは、分かりません。真相は藪の中です。

蝦夷の強引な措置は、蘇我氏内部にも反発を呼びました。蘇我倉麻呂（蝦夷の弟。蘇我石川麻呂の父）は、態度を保留しました。これは消極的な山背大兄王支持の表明です。蘇我境部摩理勢（蘇我馬子の弟。蝦夷の叔父）は、はっきりと山背大兄王支持を表明して、馬子の陵墓の築造を中止し、斑鳩の泊瀬王（山背大兄王の異母弟）の邸に立てこもりました。しかし、山背大兄王は叔父である蝦夷の言葉に逆らえないと言って、摩理勢を見殺しにしました。結局、摩理勢は蝦夷の派遣した軍によって殺されてしまいました。摩理勢の死によって、田村王の即位に異議を唱える者は誰もいなくなりました。なお、山背大兄王は、皇極二年（六四三）、蝦夷の息子の入鹿によって一族全て滅ぼされます。『日本書紀』は、一族の住んでいた斑鳩宮・斑鳩寺もこの時焼亡したと伝えています。

年が明けた舒明天元（六二九）正月四日、蝦夷と群臣が田村王に璽印を献上し、田村王は即位します。舒明天皇です。舒明二年（六三〇）十月、舒明天皇は皇居を飛鳥岡本宮（飛鳥板蓋宮伝承地の最下層遺跡）に定めました。舒明天皇は飛鳥に初めて宮を置いた大王です。これまでの大王は、蘇我氏の本拠地の中心である飛鳥に宮を置くことはありませんでした。蘇我氏の軍勢に攻められたときに、防ぐことが出来ないからです。舒明天皇は、蝦夷の支配下に入ることによって、大王の位を手にしたのです。

## ●天香具山の国見

『万葉集』には舒明天皇の国見歌が載せられています。国見とは、春、大王が高い所に登って、国の地勢、景色や人民の生活状態を望みることによって、国土の豊穡を予祝する儀式です。舒明天皇が国見のために登った天香具山は、飛鳥岡本宮から中つ道を北に五キロ進んだところにある山で、「横たわって」という形容にふさわしい、なだらかな姿をしています。

天皇、香具山に登りて望国したまふ時の御製歌

大和には 群山あれど とりよろふ 天の香具山 登り立ち  
国見をすれば 国原は 煙立ち立つ 海原は 鳴立ち立つ う  
まし国そ 蜻蛉島 大和の国は（一二）

まず、天皇は「群山」の中でも特別にすばらしいと「天の香具山」を誉め称えます。奈良盆地に三角形に並ぶ畝傍山、耳成山、天の香具山は大和三山と呼ばれますが、この中で香具山にだけ「天の」という修飾語が付いていることから分かりますように、香具山は天上世界と直結した神聖な山だと考えられていました。『古事記』の天の岩屋戸神話を見ると、

是を以ちて八百万の神、天安の河原に神集ひ集ひて、高御産巢日神の子、思金神に思はしめて、常夜の長鳴鳥を集めて鳴かして、天安河の河上の天の堅石を取り、天の金山の鉄を取りて、鍛人天津麻羅を求ぎて、伊斯許理度賣命に科せて鏡を作らしめ、玉祖命に科せて、八尺の勾玉の五百津の御須麻流の珠を作らしめて、天児屋命、布刀玉命を召して、天の香山の真男鹿の肩を内抜きに抜きて、天の香山の天の波波迦を取りて、占合ひ麻迦那波しめて、天の香山の五百津真賢木を根許土爾許士て、上枝に八尺の勾玉の五百津の御須麻流の玉を取り著け、中枝に

体天皇を支えたことで力を得た息長系王族の流れを引く王だったと推測されます。

山背大兄王の母は蘇我馬子の娘である刀自古郎女です。蘇我氏との血縁でいえば、山背大兄王はむしろ強すぎるほどです。では、山背大兄王の問題点とは何だったのでしょうか。それは、父である聖徳太子が親新羅の立場を取っていたことです（百済系移民を統括する蘇我氏は、親百済の立場を取っていました）。聖徳太子が飛鳥から離れた斑鳩に邸宅を構えたのは、蘇我氏と距離を取るためであつたと考えられています（注5）。

聖徳太子が新羅と関わりが深かつたことは、太子ゆかりの一体の仏像からうかがい知ることが出来ます。その仏像とは、京都市右京区太秦の広隆寺にある弥勒菩薩半跏思惟像です。『日本書紀』によれば、この仏像は聖徳太子から秦河勝へと譲られたものです。広隆寺の弥勒菩薩半跏思惟像は、韓国国立中央博物館蔵の金銅弥勒菩薩半跏思惟像と様式が酷似しており、新羅で作られた像であると推測されています（注6）。当時、新羅では弥勒信仰が盛んでした。新羅には花郎という女装の美少年を中心とした花郎徒と呼ばれる青年武士団があり、花郎徒は弥勒信仰によって強固な団結をしていました。弥勒菩薩が少年のような姿をしているのは花郎の姿を写し取っているからだと考えられています。斑鳩には聖徳太子が作ったと伝えられる中宮寺がありますが、この寺にも少年のような姿をした弥勒菩薩半跏思惟像があります。聖徳太子が大王になれなかったのは、推古天皇の長寿が直接の理由でしたが、蘇我氏にとって親新羅の姿勢が問題であつたことも大きな理由だったようです。父と同様斑鳩に住み続ける山背大兄王も、親新羅の立場を取っていました。山背大兄王は、蘇我氏と強い血縁がありましたが、政治的な立場は相容れないものだったのです。

# ●舒明天皇の即位

三月二日、推古天皇は枕元に田村王と山背大兄王を招き、田村王には、

天位に昇りて鴻基を經め綸へ、万機を馭して黎元を亭育ふことは、本より輒く言ふものに非ず。恆に重みする所なり。故、汝慎みて察にせよ。軽しく言ふべからず。

とあるように、「天皇は責任が重大だから身を慎んで行動に気をつけよ」と言い、山背大兄王には、

汝は肝稚し。若し心に望むと雖も、誼き言ふこと勿。必ず群の言を待ちて従ふべし。

とあるように、「お前はまだ未熟だから、もし心に望むことがあつても、口に出していつてはならない」と言つて、七日に崩御したと『日本書紀』は伝えています。この言葉通りだとすると、推古天皇は田村王の即位を望んでいたように聞こえます。

推古天皇の葬儀が終了した九月のある日、蘇我蝦夷は群臣を招集して、誰が次の大王にふさわしいかをと問うたところ、群臣の意見は田村王と山背大兄王に分かれました。そこで、蝦夷は右の推古天皇の遺言を示すことによって、推古天皇の遺志は田村王にあったとして、田村王即位へ意見をまとめようとした。この時、斑鳩の山背大兄王は蝦夷が言つた推古天皇の遺言を伝え聞いて、自分の知っている事実と異なり、本当の遺言は、

朕寡薄を以て、久しく大業勞れり。今曆運將に終きなむとす。以て病諱むべからず。故に、汝本より朕が心腹たり。愛み寵むる情、比をすべからず。其れ国家の大基は、是朕が世のみに非

え、五重塔の廻りを中金堂・東金堂・西金堂というように三つの金堂が取り囲む一塔三金堂式伽藍を持つ、日本最初の本格的寺院でした。中つ道をそのまま進むと、現在の明日香村役場付近で、飛鳥川を渡って右から延びてくる道と合流します（中つ道はここで終わりです）。飛鳥川の対岸の丘の上には、聖徳太子が建てたという橘寺が見えます。この分岐を左に飛鳥川上流へと進むと、左に蘇我馬子の邸宅があります。馬子邸には島を浮かべた池がある広大な庭が付属していたことから、馬子は島大臣と呼ばれました。後に、馬子邸は持統天皇の皇子の草壁皇子の邸宅となりました。馬子は推古三十四年（六二六）に亡くなっています。馬子の邸宅の裏にある石舞台が、蘇我馬子の陵墓だと考えられています。この時、馬子の陵墓は建設中でした。

### ●推古天皇の悩み

小墾田宮の「大殿」の南には、推古天皇の居住空間がありました。推古三十六年二月、七十五歳の推古天皇は重い病氣にかかっていました。体中に激しい痛みがあったことから、末期の癌だったと推測されます。死の床にあった推古天皇の悩みは、後継者問題でした。推古天皇の在位は三十六年にわたり、その長い在位期間に、大王候補者の皇子が皆死んでしまったからです。推古天皇の時代には、先の大王が死んでから、次の大王が即位するという決まりになっており、先の大王が生きている内に次の大王に譲位するという前例はありませんでした。

推古天皇の後継者の第一候補は、竹田皇子でした。竹田皇子は、敏達天皇と推古天皇との間に生まれた皇子です。両親が天皇であり、母の推古天皇が蘇我氏の血を引いている（推古天皇の母の堅塩媛は、蘇我稲目の娘です）ことから、蘇我氏としても大王候補として申し分ありませんでした。当時、大王に即位する適正年齢は三十歳程度と考えられていました。崇峻五年（五九二）十一月

三日、崇峻天皇が蘇我馬子の放った刺客の東漢馬に殺されたとき、竹田皇子はその年齢に達していなかったため、竹田皇子即位までの中継ぎとして推古天皇が即位したようです。しかし、推古天皇即位のすぐ後に、竹田皇子は亡くなったようです。

次に後継者候補として浮上したのが、推古天皇の同母兄である用明天皇の皇子である聖徳太子（厩戸皇子）でした。聖徳太子の母は、蘇我稲目の孫の穴穂部皇女です。つまり、聖徳太子は父も母も蘇我稲目の孫という、蘇我氏の血を強くひいた皇子でした。推古二年（五九三）、聖徳太子は摂政となり、蘇我馬子と共に推古朝を支えました。推古天皇の在位期間がここまで長く続かなければ、おそらく聖徳太子が次の大王として即位したでしょう（ただし、後に述べように、聖徳太子にはある問題があり、スムーズに即位できたかは疑問もあります）。しかし、推古三十年（六二二）二月七日、聖徳太子は病没してしまいます。推古天皇は、長い在位期間の間に有力な後継者を二人とも失ってしまったのです。結局、死の床にある推古天皇に残された後継者候補は、二世王（大王の孫）である田村王と山城大兄王しかいませんでした。しかし、田村王も山城大兄王も、蘇我氏（この時の大臣は蘇我蝦夷です）にとつて、次の大王とするのに問題を抱えていました。

田村王は蘇我氏の血をひいていないことが問題でした。田村王の父は敏達天皇の皇子である押坂彦人大兄皇子ですが、押坂彦人大兄皇子の母は息長真手王の娘の広姫です。息長真手王の出自は不明です。息長真手王については、王とあることから王族であること、息長は近江の地名であるから近江と関係あることが推測されます。このように名に「息長」という名を持つ「王」のグループは、息長系王族と呼ばれています。推古天皇の祖父である継体天皇は越前国高向（現在の福井県坂井市）を統治する傍系王族（応神天皇の五世孫）でしたが、同じ傍系王族の息長系王族の援助によって即位できたといわれています（注4）。田村王は、継



うな経緯から、飛鳥は蘇我氏の本拠地となりました。本稿では、まず、推古三十六年（六二八）頃の飛鳥の景観を再現してみたいと思います。

山田道と飛鳥川が交差する手前の右側には、豊浦寺（現在の向原寺）があります。『日本書紀』によれば、欽明十三年（五五二）、百済の聖明王が献上した金銅の釈迦像を、大臣の蘇我稻目が天皇から拝領し、向原にあった稲目の邸宅で祀り、そこを寺としたといひます。この記述を信じれば、豊浦寺は日本最古の仏教寺院ということになります。豊浦寺の向かいには、以前、推古天皇の小墾田宮跡だと考えられていた「古宮土壇」があります。雷丘東方遺跡で小墾田宮と墨で書かれた土器が出土したことから、現在では、古宮土壇は豊浦大臣と呼ばれた蘇我蝦夷（蘇我稻目の孫、馬子の子。皇極五年（六四五）の乙巳の変で、息子の入鹿と共に滅ぼされました）の邸宅跡だと考えられています。蝦夷邸の東には、飛鳥川沿いに伸びている太子道が斜めに合流しています。太子道とは、推古天皇の摂政だった聖德太子（厩戸皇子）の一族が住んでいる斑鳩と飛鳥とをつなぐ道です。桜井山田道と太子道は、豊浦寺と蝦夷邸の先にある飛鳥川の橋の手前で交差していました。聖德太子は太子道を馬に乗って、小墾田宮へと通ったと伝えられています。聖德太子は推古三十年（六二二）に亡くなっています。推古三十六年現在、斑鳩には聖德太子の息子の山背大兄王が住んでいます。

飛鳥川には呉橋という中国風の橋が架けられていました。呉橋を渡ると、正面に小さな丘があります。雷丘です。平安時代初期の説話集『日本霊異記』巻一の「雷を捉ふる縁」には、雄略天皇の時代、小子部栖軽がこの丘で雷を捉えたので、この丘は雷丘と呼ばれるようになったとあります。また、この丘に持統天皇が行幸した様子を、柿本人麻呂が称えた歌が『万葉集』（3二三五）に残されています。雷丘は切り通しになっており、山田道はその

まま西へと延びています。雷丘は、飛鳥の大門のような位置を占めているのです。

雷丘を抜けるとすぐに、左手に小墾田宮が見えます。先に述べましたように、この地点から小墾田宮という墨書土器が出土しました。小墾田宮は、推古十一年（六〇三）に作られました。岸俊男（注3）の推定によれば、「大殿」を中心に「閤門」の前に「庭」を置き、左右に「序」を配する「朝堂の初歩的形態」を持つ宮であったようです。この宮で、冠位十二階の施行、十七条憲法の発布、遣隋使の答礼使として日本にやってきた隋の裴世清と対面する儀式が行われました。中国式の宮殿は、北に正殿が作られ、南に門が作られます。小墾田宮の遺構はまだ確認されていませんが、小墾田宮の南門が桜井山田道に面していたと推測されます。

小墾田宮の手前で、桜井山田道は南北に延びる直線道路と交差します。中つ道です。左を見ると、中つ道の先に、後でお話しする天香久山が横たわっています。反対の右側に曲がると、飛鳥の中心部に続きます。少し寄り道をして、右側に曲がって見ましよう。しばらく中つ道を進むと、右手に、中央に大きな槻の木が生えている、石敷きの広場があります。この広場は、現在研究者に槻の木広場と呼ばれている場所です。槻の木広場は、後年、ここで行われた打毬（現在のポロのような競技）をきっかけとして、中大兄皇子と中臣鎌子が出会ったことで有名です。また、乙巳の変の後に、孝德天皇、皇極天皇、中大兄皇子は、この広場で誓約を結びました。槻の木広場は、入鹿の首塚のあたりにあったと推定されています。槻の木広場の中つ道をはさんだ向かいには、蘇我氏の氏寺であった法興寺（現在の飛鳥寺）があります。法興寺は、蘇我馬子（蘇我稻目の子。敏達・用明・崇峻・推古の四代にわたって大臣を勤めました）が発願して建立して寺です。法興寺の中心には、百済から渡来した仏舍利を収めるための五重塔が聳

# 天香具山の国見—『万葉集』12—

Kunimi in AmanoKaguyama—a Study of “Manyousyu” Song No2—

中村学園大学 流通科学部

福 沢 健

## ●はじめに

『万葉集』巻一の巻頭には、雄略天皇の歌（1-1）が置かれていました。雄略天皇は、息長系王族の血を引く古代の理想の大王でした。『万葉集』巻一は、それに続く歌として舒明天皇の時代の歌を載せています。雄略天皇の歌は飛び抜けて古い時代のものであるのに対して、舒明天皇の時代からは各天皇の御代の歌がほぼ切れ目なく続いています。ここから、『万葉集』巻一については、実質的に舒明天皇の時代から始まっているという捉え方が通説となっています。辰巳正明（注1）は、舒明天皇の時代の歌について、望国・遊幸・行幸がセットとして載せられており、ここに新しい儒教的な天皇の原型が示されていると述べています。舒明天皇の時代のはじめを飾るのが、望国の歌である舒明天皇の歌（1-2）です。

では、なぜ舒明天皇が新しい天皇の原型として位置づけられたのでしょうか。息長系王族出身の二世王である舒明天皇は、当時権力を握っていた蘇我氏とは血縁関係がなく、本来ならば即位できない立場でした。それが、推古天皇の長命、蘇我氏の対外政策など、偶然的要素が積み重なって、舒明天皇の即位が実現しました。舒明天皇が即位することによって、新たに息長系王朝とでも呼ぶべき新グループの天皇が出現しました。『万葉集』は、息長系王朝の始祖として舒明天皇を実質的な「歴史」（注2）の始ま

りに据えました。舒明天皇の歌から『万葉集』の「歴史」が始まる理由について、息長系王族に着目しつつ述べてみたいと思います。

## ●推古三十六年の飛鳥

山田道という古代道路があります。奈良盆地を東西に横切る道で、現在の近鉄橿原神宮駅から、飛鳥の北を通って、JR桜井駅まで続いています。橿原神宮駅前には、南北に国道二十四号線が走っています。国道二十四号線は、古代の下つ道と呼ばれた幹線道路です。下つ道と山田道の交差点付近は軽の衢と呼ばれ、ここに軽の市が定期的に開かれていました。軽の衢から山田道を東に進んでいきますと、右手に甘櫓丘が見えてきます。甘櫓丘の東麓の飛鳥川流域は飛鳥と呼ばれる地域で、六世紀初めから七世紀前半に権力を握った蘇我氏の本拠地だったところです。前稿「大王の歌」において、四七五年に高句麗の長寿王が百済の漢城を陥落させて、百済が一旦滅亡したことをお話ししました。この時、たくさんの百済の難民が日本にやってきました。この人たちは今来漢人と呼ばれ、その優れた土木技術を用いて、湿地だった飛鳥地域を開発しました（飛鳥は昔「大口が原」と呼ばれ、狼が出没する荒野だったようです。「大口」とは狼のことです）。蘇我氏はこの今来漢人を支配下に置いて、勢力を拡大してきました。このよ